

幼小接続期におけるカリキュラムの開発Ⅱ

善野 八千子¹⁾ ・ 前田 洋一²⁾

¹⁾ 奈良文化女子短期大学、²⁾ 鳴門教育大学大学院

An Attempt of the Curriculum Model Development for Connecting Kindergartens to Elementary Schools Ⅱ

Yachiko Zenno¹⁾, Youichi Maeda²⁾

¹⁾ *Narabunka Women's College*

²⁾ *Graduate School of Education, Naruto University of Education*

本研究は、幼児教育と小学校以降の教育に関わる双方による教育課程の理解を中心にした「育ちと学びの連続性」及び子どもの成長保障と学力保障の両全を目的として、幼小両者の教職員の連携活動を推進するカリキュラム開発及び組織開発のあり方を探った継続研究である。今回は、「汎用性のある幼小接続期のカリキュラム作成」の中で、とりわけ就学直後の課題を探り、就学前のカリキュラム改善のためのフォーマットを作成する。このことにより、教育課程の理解を入り口として、教職員の理解と子ども理解を同時にすすめながら、幼小連携を一層推進しようとするものである。

キーワード：幼小連携 (Cooperation between Kindergartens and Elementary Schools)、教育課程 (Curriculum)、カリキュラム開発 (Curriculum Development)、幼児期の教育 (Childhood Education)、交流活動 (Interchange Activity)

1. 問題と目的

教育の連続性・一貫性の確保が求められて久しい。本テーマにてらして、幼児期と児童期の視座からも体系的な教育が幼小接続期に組織的・継続的に行われているとは言い難い現状であり、今なお課題が山積している。

今次、学習指導要領の改訂に伴い、初めて「スタートカリキュラム」という用語が『小学校学習指導要領解説生活編』に明記された¹⁾。木村²⁾は、「遊び中心の生活から教科学習中心の生活へ変化する段差」について、自分で決めた課題（自分のしたい遊び）を自分で達成する（自分の力で実現する）生活から、教科学習では外から来る課題に自分がどのように対処するのか（知識・技能の習得）が問われる」と指

善野 八千子 〒631-8523 奈良市中登美ヶ丘3-15-1 奈良文化女子短期大学

前田 洋一 〒772-8502 徳島県鳴門市鳴門町高島字中島748番地 鳴門教育大学大学院

摘している。

筆者らは、生活科創設期からの実践を踏まえ、2009年からは幼児教育と小学校以降をつなぐ「幼小接続カリキュラム」を「就学前後の接続カリキュラム」として、週案・日案レベルの作成をめざして着手してきた。

2010年には、「幼児期と児童期の接続カリキュラムの開発」において、就学前3週間と就学後の4週間週案を作成した³⁾。特に、就学後の4週間については、日案の作成⁴⁾にまで至っている。しかし、就学前のカリキュラムの日案については、課題として残されている。

本研究の目的は2点ある。1点目は、新たな週案作成のフォーマット（仮称：「幼小接続カリキュラム就学前フォーマット」）の提示である。そのフォーマットをもとに検討を深めながら、今後、幼小接続期就学前3週間の日案レベルまで作成していく。

現在作成されている就学前3週間の週案（第1次）（以下、第1次案と表記）は、週ごとの育てたい姿及びねらいと活動内容を3つのカテゴリー⁵⁾に分類して、組み込んだものである。そこには、入学後の課題を解決するための視点が明確にされていない。一般的には日案を作成する際には、スコープとシーケンスの視点から週案を細分化し再構成することが必要である。つまり、幼小の接続を考慮した日案を作成するためには、この時期に必要な活動内容を子どもの学びと育ちを接続するという視点やそれに対応した保育資料の提示などを週案に記述することが必要となる。そこで、新たな週案作成のフォーマットを検討する。

2点目は、この作成過程を通して議論された内容を分析し、幼小連携を目指した教職員の連携の在り方を探ることである。さらに今後の展開としての課題を考察し、幼小連携の方向性や課題に言及する。

2. 方法

2.1 幼小接続カリキュラムのシーケンス

幼小接続カリキュラムのシーケンスを考察する場合、2つの視点が重要である。1つは、幼稚園教育要領、もう1つは、保育所保育指針である。まず、幼小連携に関して幼稚園教育要領から見ていくことにする。

【幼稚園教育要領】⁶⁾

第3章 指導計画及び教育課程に係る教育時間の終了後等に行う教育活動などの留意事項

第1 指導計画の作成に当たっての留意事項

1 一般的な留意事項には下記の記述がある。

(9) 幼稚園においては、幼稚園教育が、小学校以降の生活や学習の基盤の育成につながることに配慮し、幼児期にふさわしい生活を通して、創造的な思考や主体的な生活態度などの基礎を培うようにすること。

【保育所保育指針】⁷⁾

第三章 保育の内容

2 保育の実施上の配慮事項

(四) 三歳以上児の保育に関わる配慮事項

ケ 保育所の保育が、小学校以降の生活や学習の基盤の育成につながることに留意し、幼児期にふさわしい生活を通して、創造的な思考や主体的な生活態度などの基礎を培うようにすること。幼稚園教育要領・保育所保育指針に共通に見られる「創造的な思考や主体的な生活態度などの基礎を培う」ことが目標となっている。

2.2 「就学前3週間」カリキュラムの対象者

本研究が扱う幼児教育の対象時期をあきらかにしておく。幼児期は、満1歳から満4歳までの幼児前期と、満4歳から満7歳までの幼児後期とに大別される。本研究が対象としたのは、幼児後期、特に、5歳児の2月末～3月末である。

2.3 手順

以上をふまえて、第1次案の改善をめざした課題の明確化及び要素の抽出をする。

方法については、次の手順を進めていくこととした。

- (1) 「小学校入学までに育ててほしい力」(就学直後の課題)の聞き取り調査
- (2) 第1次案の改善のための要素の抽出
- (3) 「幼小接続期カリキュラム就学前3週間」(第2次)(以下、第2次案と表記)作成のためのフォーマットの提示

なお、上記の手順は、「奈良文化女子短期大学幼小連携WG合同研究会」で進めていく。この組織は、既に、2009年3月より毎月1回、現職の教員・保育者、教員及び保育者をめざす学生、保護者、教育行政及び子どもに関わる業務の関係者等に広く呼びかけ、検討組織として継続実施しているものである。この合同研究会の構成メンバーは、固定的ではないものの、職歴、経験、年齢、性別など、様々な文化的背景を持った人々の集まりである。今後の幼小連携を推進する組織としてのモデルとなると考える。

3. 小学校入学までに育てたい力

3.1 入学直後の子どもの実態の聴き取り

3.1.1 手続き

小学校入学直後の実態を明らかにするため、その子どもたちに直接関わる教員を参集し、自由記述後意見交換というブレインストーミング形式で聞き取り調査を2部に分けて設定した。

教示は「この調査は、今求められている就学前教育のあり方をあきらかにし、幼小接続カリキュラムの作成を通して、よりよい幼小連携を推進するためのものです。是非、皆様の忌憚のないご意見を伺わせていただきたいと思います。ご協力をお願いいたします。あなたは、就学前後の子どもの実態から就学前にどのような目標や活動及び子どもや保護者へのはたらきかけが必要だと思いませんか。」というものである。

- (1) 実施時期 2011年4月
- (2) 実施対象者 公立・私立幼稚園教諭15名、公立・私立小学校教諭13名
(小学校1年生担任教諭及び前年度までの5歳児担任経験のある幼稚園教諭)
- (3) 場所 奈良文化女子短期大学 第1演習室

3.1.2 結果

聞き取りによる回答を3群に整理した。以下のとおりである。

○登・下校

- ・登校は集団であっても、下校時は学級によって時間差が出てくる事が不安である。保護者からも不安の声が届くことが多い。
- ・下校時の課題は大きい。校区の状況にもよると思われるが、迷子になって自宅にたどり着けなかった子どもがいる。
- ・入学前に実際に通学路を歩いてみる体験があることや事前に周知していることが、子どもの安全や保護者の安心につながる。
- ・一人で安全に帰宅できるために、入学前から通学路を親子で歩くことも必要ではないか。
- ・幼児教育施設で、「さんぽ」のとらえ方を見直す事も必要である。
- ・通学路が設定されている小学校は多いが、非常時の対応を勘案することが求められる。

○汎用性のある幼小接続カリキュラム就学後18日案（善野2010）⁸⁾の実践から

- ・汎用性のある幼小接続カリキュラム就学後18日案（善野2010）の活用は有効で、学校の実態に合わせて運用し、実践している。
- ・校内で昨年度作成のスタートカリキュラムがあっても、子どもの実態に応じて臨機応変に改訂することが求められる。
- ・今年度は、入学式後のカレンダーが月曜日から授業が始まり、1週間連続の第1週目のスタートとなった。
- ・学校行事の設定により、第1週目の金曜日（入学後5日目）が保護者参観日であったため、怒濤の一週間であった。入学後からすぐ「聞く・話す」指導の徹底はもとより、保護者の期待に応えるために、通常2週目の活動も加えて子どもの作品を掲示して教室環境を整えた。時間数の確保が必要である。
- ・環境の違いを考慮した指導の重要性に視点をおくと、衣服の着脱等、入学後の基本的な生活習慣の早期の確立につながった。

○その他

- ・ゆっくりと指導をする時間の確保が必要である。
- ・幼児教育施設と小学校の環境は、空間の広がりからくる物的環境と空間的環境の大きな差異がある。
- ・多様な幼児教育施設から入学している現状である。まず、これまでの幼児教育施設での方法をその都度子どもから「聞く」。その中で、小学校でも環境に合わせて方法も続けていくことが大切である。つまり、「よいことをつなげる。」事が重要である。

- ・就学前に入学後の不安を把握する機会を持つ。
- ・小学校1年生に関わる教員から4月入学直後の子どもの姿や反応の中で、「想定外」「想定不可能であった反応」を抽出することが必要である。
- ・プラス面としては、想定以上に子どもがもっている力や育ちを捉えて広める。マイナス面としては、想定外の行動、予期しない生活習慣の徹底指導の必要性を確認する。
- ・入学前の子どもと保護者の安心のためにも、入学後のトラブルを整理して提示することが必要である。

これらの聞き取り調査を通して、幼小接続カリキュラム改善の視点が、大きく2点浮かび上がってきた。

1点目は、「自力での登・下校からスムーズな適応を生み出すため」に必要なことである。それは、就学前の散歩や入学前一日体験において、学校までの通学路を実際に歩いてみることや保護者に働きかける意義の確認と時間の確保である。

2点目には、「環境の違いによる不安解決のため」に必要なことである。具体的には、入学前一日体験の位置づけと活動内容の再検討である。

さらにこのような意見交換を通して、幼児教育に関わる者が小学校教育に関わる者へのメッセージの役割を果たし、またその逆の立場でメッセージとなるという双方向のメッセージの育成が行われた。幼から小へ、小から幼へのメッセージである「幼小接続期の相互理解者・伝達者」を育てる場となった。

3.2 「就学直後の課題」調査からの考察

就学直後の課題を探る事を目的として、上記の聞き取り調査に加え、次の1～3の既に実施されていたアンケートを参考にした。

1. A市教育委員会がまとめた『平成20年度文部科学省委託 幼児教育の改善・充実調査研究事業 保育や教育を共に考え、学びの基礎の充実をめざした連携体制の構築』（2009年3月）⁹⁾
2. 幼小連携事業委嘱校であるB市立C幼稚園が実施したアンケート調査（2009年6月）⁸⁾
3. D市が実施した就学前教育充実のためのアンケート集計結果（2010年11月）¹⁰⁾

上記の調査及び結果の考察からは、就学前の幼児教育において必要な共通点として以下の5点に整理することができた。

- (1) 「聞くこと、話すこと、人とのかかわり」等の実態把握と保育・教育の進め方
- (2) 発達を踏まえた生活習慣の確立と援助
- (3) 生活時間の区切りを意識した保育・教育
- (4) 幼児教育修了前の環境構成と子どもの主体的活動のあり方
- (5) 小学校入学を控えた子どもの実態を踏まえた教育の連続性

アンケート結果や考察にもとづいて、「第2次案」作成のためのポイントが明らかになった。それは、小学校での指導を容易にすることを目的とした「就学前カリキュラム」ではなく、就学後に子どもの育

ちと学びがつながるためにはどのようなカリキュラムの改善が必要かを幼小教育に関わる者が共に検討することである。今後、汎用性のあるカリキュラムを改善し実践し、検証していくためには、週案レベルまで具体化できるよう、上記の5点を活動内容の視点としてフォーマットに示すこととした。

4. 第2次案の作成に向けて

4.1 要素の抽出

「第2次案」作成のために、たたき台として「第1次案」の改訂作業を基本とした。その改訂にあたっては、「育てたい力」「めざす姿」を設定して検討を進めことを前提にした。

(1) 具体的内容

- (a) 検討対象期間は、5歳児の2月末～3月末までとする。
- (b) 幼稚園教育要領・保育指針に基づいた内容とする。
- (c) 就学後に課題となっていることをふまえる。

(2) 検討方法と内容

就学前3～1週間前について、幼小混合の保育者・教師等で活動カテゴリーを軸とした幼小混合グループ少人数で3グループに分かれて意見交換する。以下に、各グループで検討したねらいと意見交換の内容を示す。

第1グループ「体験入学から入学へ」

◆自分の成長を振り返ると共に、小学校生活に期待を持ち、自信や喜びを持って生活しようとする。

- ・1日学校体験から修了式までの項目を話し合うことが大切である。
- ・基本的な生活習慣（手洗い、服のたたみ方、片付け等（学校ごっこの中で発展する）
- ・「あこがれ、見通し、自信」がキーワード。知って興味をもってあこがれをもつ。
- ・体験入学は、2月末までにすることが望ましい。
- ・より意義のある「1日体験入学」のためには幼児教育と小学校との話し合い及び連携の積み重ねが大切
- ・某幼稚園と小学校とのやり取り…小学校に入学するまでにいろんなことを体験させておきたいと考える幼稚園側に対し、小学校側からは、全てを体験してしまうことは小学校での楽しみを奪うことになる（焦らなくても良い）との話し合いができた→年長4月からの1年間の積み上げの成果。
- ・1日学校体験でのそれぞれの側からのねらい（それぞれの想い）の相違を埋めていく作業が必要である。
- ・子どもにとって楽しみなものである必要がある。
- ・発表会をもつ時期によって左右される。生活発表会は、保育活動の集大成であることから2月中にすることが望ましい。
- ・幼児にとっては、入学前に小学生と出会うことによって、入学したときに親しみや安心を感じる要因となる。（入学時点では、1年生と2年生）

- ・幼児がもっている「期待や希望」を広げる活動とする。
- ・一日学校体験後、幼児が何をするかを想定する。(徳島市板東幼稚園・小学校幼小接続のためのP30参照)
- ・入学後に環境の違いによる物理的な要素での不安を軽減させることができる。
- ・基本的な生活習慣が少しでもスムーズに定着できるようにする。
- ・幼児が、入学前に何を不安と感じるのかを取り出していき、それらの不安を取り除いていく。(1日体験の様子を写真で園内に掲示することによって、保護者の不安も軽減された事例紹介)
- ・連携の「ずれ」がおこらないように、幼稚園・保育園と小学校の教職員が話し合う。
- ・小学生のイベント的な合奏や発表会でなく、日常的な学習の仕方に触れることを幼児は期待している。
- ・小学校では、次年度の1年の担任に今年度の担任が引き継いでおく。
- ・今後、1日入学の日案を具体的に作成していく。

第2グループ「遊びと制作活動」

◆学級全体活動や周りの友達と協力して遊ぶ楽しさを味わう

- ・1日学校体験で実際に活動することが重要である。
- ・共同で遊んだり、共同制作をしたりする中で友達のよいところを伝え合う。
- ・ひなまつり等の行事に関わる制作活動
- ・製作・遊び 絵や写真で思い出を振り返ることにより、自分の成長に気付く。
- ・プールの壁に似顔絵を描く。(卒園後に振り返りに同窓会で来園)
- ・自分の全身を作る。
- ・部屋の環境づくり、作品つづりの作成
- ・諸行事等、それぞれを意味ある活動にし、子ども自身が楽しいと感じる活動を取り入れる。
- ・制作活動は、技能、スピードの差が出る。小学校での時間で活動を区切る環境への準備として、その先にあることへの見通しを立てながら進めることにより時間感覚を育てていく。
(入学後の小学校でも同様に見通しを立てながらの活動を通して「時間で区切る活動」への急激な変化へ対応する)
- ・年間計画表に基づいて取り組む。
- ・メッセージカードに一言指導者と共に書く。
- ・サインペン等の持ち方の指導をどうしたらよいか難しい。
- ・絵と文字の指導が幼小で異なる。
- ・文字に対して、関心や意欲がもてる子どもにすることが大切である。
- ・幼児期の環境の中でどのように醸成していくか検討していく。
- ・制作活動は特に技能面での格差もあり、時間を見通して行動することの難しさがある。
- ・入学前に小学校生活の時間枠を意識させる活動を組み込むことも必要である。

第3グループ「身近な自然と遊び」

◆春の訪れに気づき、自然の変化に興味や関心を持つ

- ・自然環境の中から生まれた興味・関心・疑問・気づき等を継続させるために、個人持ちのミニ図鑑で「比べる・調べる・知る・関心を広げる」などの活動を繰り返すことが、学びへの意欲を喚起したり、継続させたりすることができる。
- ・具体的事象（氷づくり、春の芽、だんごむし、アゲハの卵など園内外の自然物）
- ・入学前は、自然の変化がにくく、関心が広げにくい時期である。しかし、環境作りによって、変化の少ない園庭や畑をふまない約束、文字への関心、発芽への関心を広げる
(ex.植えた球根の花壇に「ここには、チューリップがまだねています。」等と書いた立て札を立てる。また、冬眠中のカメの水槽に「まだ、カメは冬眠中。起こさないでね。いつ自分で起きるかな。」とメッセージを書いたり、作品の壁面にクロッカス、チョウ、つくし等子どもが見つけたモノを写真や絵で掲示したりしていく。
- ・「季節の変化」「命の大切さ」「感じる心」自然を通して人間関係を学ぶ
- ・食育…春野菜の種付け（次の学年につなげていく）
- ・「春探し」を通して、幼稚園・保育所と小学校の共通のものを発見しながら活動することも大切である。
- ・目的が違うので同じものを栽培することの意味を確認する。
- ・「体験の経験化」として、言語化していく児童期を見据えて、幼児期ならではの自然との関わりを十分にさせる。
- ・保育者が保護者に対しても幼児期と児童期の「栽培のねらいや関わりの違い」を説明できることが大切である。（アサガオや野菜の栽培等）

以上の具体的な検討内容を筆者らがまとめ、週案作成のためのファクター（要素）として提示しながら、「第2次案」を現在作成途中である。

4.2 幼小接続期カリキュラム就学前フォーマットの提示

幼小接続期カリキュラムをどこからどこまでの範囲とするかは、検討を要するところである。当面、今回は、5歳児2月末から、小学校入学直前までの時期に焦点化した。子どもの意識にたてば、もっとも環境の違いへの適応が求められ、期待と不安が具体的になる時期だからである。

一般的には、幼小連携のための積極的な働きかけは、主に幼児教育側からされているのが現状である。しかし先述のように本研究においては、公立・私立を交えた保育者と小学校教師が話し合う地盤づくりを2009年3月から、双方が「共に動き考える」組織を継続してきた。そして、「子どもたちが連続的に学び育っていく存在」であることの共通理解のもとに、それぞれの教育・保育の指導に生かしている。そこで、検討されたことを基盤にして、必要項目をまとめてフォーマットを作成した（付表1）。その特徴は、3点ある。

1 点目には、活動内容の視点を明確にしたことである。アンケート結果の考察や聞き取り調査から得られた以下の5点を組み込んでいる。

- ① 聞くこと、話すこと、人とのかかわり

- ② 発達を踏まえた生活習慣の確立
- ③ 生活時間の区切りを意識した活動
- ④ 幼児教育修了前の環境構成と子どもの主体的活動
- ⑤ 小学校入学を控えた子どもの思いや願いの表現

2点目には、活動の内容の視点に対応した保育資料を具体的に示す以下の欄を設定したことである。

- ① 歌、絵本、お話 ○春の自然 ○修了式に向けて ○小学校入学に向けて
- ② 体を動かす喜びを感じる曲や体操
- ③ 自然の草花・生き物 ○春の芽生えを感じる草花 ○春の訪れを感じる生き物
- ④ 行事関連・制作活動

これらは、実践者が各園の環境や教材研究をもとに検討しながら、具体的な保育資料を記載していく。

3点目には、保育者の援助を次の6点に整理しながら計画していくことである。

- ① 時間（計画・個に応じた枠組み）
- ② 空間（環境設定、活動場所）
- ③ 人間（人間関係能力を育む出会い）
- ④ モノ（教材・教具、自然・社会）
- ⑤ 技能（スキルと発達段階の把握）
- ⑥ 心情（子ども理解と働きかけ）

このフォーマットは、カリキュラム改善にあたって基本となる要素を踏まえたものであり、子どもの実態や発達段階または経験の違いに合わせて質や量を勘案しながら、工夫改善していくためのツールである。

5. まとめ

5.1 接続カリキュラム作成における課題や手だて及び具体的方法

本研究では、幼児教育と小学校教育との差異を踏まえた接続カリキュラムのために必要な視点を明確にししながら、保育・教育現場のリアルな現実から実践につなげる研究を進めた。また、理論構築だけでなく、具体的な週案レベルのカリキュラム作成と改善を試みている途上である。

参画者の多くは「小学校の現職教員の話聞くだけでも新しい発見があった。」「地域を共有しない参画者同士の合同研究会に身を置いて、この空気を吸うことで、これまでの自分の実践を振り返り、改善への手がかりがうまれた。」「これまでの評価観と子ども観を大きく転換させられたり、揺さぶられたりしている。」「フォーマットをもとに週案を検討することで、入学前の子どものにつけたい力が一層意識されてきた。」等と述べている。

これらのことから、次の3点の重要性を整理することができる。

1点目には、メッセージの育成である。幼から小へ、小から幼へのメッセージという「教師間の相互理解者・伝達者」を育てるということである。

2点目には、評価観と子ども観の共有である。「保育・授業カンファレンス」や「合同研究会」において、活動の事実から「私は子どもをこう見た」という意見交換することである。

3点目には、「カリキュラムの連携」から「実践連携へ」の発展である。「交流イベント」から「ねらいを明確にした幼・小合同保育・教育へ」の転換を図っていきたい。

5.2 今後の展開と課題

幼小連携に関して、組織開発の点から述べると、「連携体制づくり」は教職員が双方の保育・教育を知るところから始まることは従来から言われ続けていることである。しかし、未だに、「幼小連携」と称する研修会にも関わらず、受講者が公立の幼児教育に関わる者のみであったり、小学校教育に関わる者だけを対象としていたりする官制研修が少なくない。

幼児教育においては、小学校入学に向けての基礎・基本となる力を培う保育・教育の充実をめざすことが基本となる。しかし、就学前教育を小学校入学に向けての準備講座や練習期間とするような理解が、小学校教育に関わる側にあっては「連携体制づくり」は結実を見ない。さらに、小学校教育においては、幼児期に培われた子どもの力を十分把握して、入学以降の生活や学習に生かすことが基本である。

最後に、あまり言及されることが多くない研究者の役割について触れておきたい。研究のマネジメントを務める「研究者」の協力研究の一貫性は重要な意味を持つ。幼児教育と小学校教育との間の理論的調整者の確保である。研究者は、幼児教育と小学校教育それぞれの等距離に位置できる人が望ましい。それぞれの異文化性に気づき、またそれを整理しながら「意味づけ、価値付け、方向付け」していくことが必要だからである。それによって、小学校教育からの「就学前に育てておいてほしい力」という要望から、「当事者として、引き継いで育てていく力」を意識した教育活動の連続性が担保されるのである。

今後の課題の一つには、幼小接続カリキュラムの具体的な週案の作成及び提示に基づく実践並びに検証が残されている。実践にあたって、幼児教育と小学校教育が互いの教育の特色の独自性や連続性を理解するためには、日常的な子どもの姿に触れたり、具体的な事柄についての指導をリアルタイムに見たり聴いたり、記録したりできることが大切である。一層の連携を進めていくための「幼児、児童が交流の機会をもつ」ことが必要である。

その例として、各施設の近隣や小学校内に共同の栽培園や田畑をもつことを進めていきたい。そこで、ダイナミックな泥んこ遊びや虫取りをしたり、作物を育て収穫を得て調理したりする機会等も継続的かつ発展的な幼小連携活動となるであろう。また、地域の公園や公共施設での共同遊びや共同清掃等も考えられる。つまり、子どもが育つ地域を基盤として、幼児教育・小学校以降の教育・地域をつなぐ合同授業の年間計画への位置づけである。

さらに、具体的に「入学前一日体験」の保育案・指導案も検討中である。どの地域においても、目的と実践内容と時期がほぼ共通であろう入学前の「入学前一日体験」の保育案・指導案の検討と検証をしていく必要がある。その理由は、子ども同士が共に活動する場に参画することにより、発達の段階における子どもの実態とそれにかかわる教師や保育者の指導姿勢をとらえ直したり、それぞれの教育の内容や方法の独自性を理解したりしながら、連続性を考えていく機会となるからである。

幼児期の遊び中心の生活経験を踏まえた、合科的・関連的な学習の導入が低学年教育に必要であり、その中核を担うのが生活科であることは首肯する。しかし、小学校入学時のカリキュラムを「スタートカリキュラム」と称することは果たして是であろうか。少なくとも生涯学習における人生の「スタート」というなら、初めての集団生活において協同的に学び始める幼児期のカリキュラムこそが「スタートカリキュラム」ではないだろうか。入学後のカリキュラムを「スタートカリキュラム」とすることから、入学前のカリキュラムを「アプローチカリキュラム」と称することも散見する。この表現は、小学校教育側からの論理だと捉えられはしないかと危惧するのである。

これからの教育現場において、認定子ども園等の幼保の両面から子どもの保育・教育にあたり、保護者の育成や子育て支援を経験した保育者が多く出現するであろう。そのような人材が、小学校教育に関わることも視野に入れた研修プログラムによって、保育者と教員双方のライフステージに位置づけられることを期待してやまない。

謝辞

本稿は、平成22年度・23年度奈良文化女子短期大学幼小連携WG合同研究会の成果の一部をまとめたものです。研究にあたり、参加者各位、奈良市・大和郡山市・摂津市の各教育委員会の皆様には多大なご協力をいただきました。ここに記して感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 文部科学省 (2008) 小学校学習指導要領解説生活編. p.53.
- 2) 木村吉彦 (2008) 幼小連携とスタートカリキュラム (2) ～スタートカリキュラムの意義と作成ポイント. 新学習指導要領解説連続講座「新しい生活科の姿」第4回. p.12.
- 3) 善野八千子・前田洋一 (2011) 幼児期と児童期の接続カリキュラムの開発. 71-98. Mj-Books.
- 4) 善野八千子・前田洋一 (2011) 幼児期と児童期の接続カリキュラムの開発. 81-98. Mj-Books.
- 5) 善野八千子・前田洋一 (2011) 幼児期と児童期の接続カリキュラムの開発. 71-72. Mj-Books.
- 6) 文部科学省 (2008) 幼稚園教育要領. p.21. 教育出版.
- 7) 文部科学省 (2008) 幼稚園教育要領 保育所保育指針. p.117. 教育出版.
- 8) 善野八千子 (2010) 幼小接続期におけるカリキュラム開発. 奈良文化女子短期大学紀要41: 55-56.
- 9) 奈良市教育委員会 (2008) 平成20年度文部科学省委託 幼児教育の改善・充実調査研究事業 保育や教育を共に考え、学びの基礎の充実をめざした連携体制の構築. 7-9.
- 10) 摂津市教育委員会 (2010) 就学前教育充実のためのアンケート集計結果. 1-5.

付表1 就学前接続カリキュラム 週案作成 フォーマット (2011 善野八千子)

◆修了前()週 5歳児 週案		ねらい	
月日(月)～ 月日(金)		例○自分の力を十分発揮しながら友達と協力して、遊びや生活を進め充実感を味わう。 ○思いや考えを様々な方法で豊かに表現し、いろいろな活動に楽しんで取り組む。 ○身近な自然や社会事象に関心をもち、興味を持って関わったり考えたりして生活を豊かにする。	
子どもの姿	<ul style="list-style-type: none"> ・友達や異年齢児と関わる姿 ・修了式に向けての実態 ・小学校入学に向けての様子 	<p>保育資料</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 歌、絵本、お話 <ol style="list-style-type: none"> ①春の自然 ②修了式に向けて ③小学校入学に向けて 2. 体を動かす喜びを感じる曲や体操 3. 自然の草花・生き物 <ol style="list-style-type: none"> ①春の芽生えを感じる草花 ②春の訪れを感じる生き物 4. 行事関連・制作活動 	<p>保育資料</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 歌、絵本、お話 <ol style="list-style-type: none"> ①春の自然 ②修了式に向けて ③小学校入学に向けて 2. 体を動かす喜びを感じる曲や体操 3. 自然の草花・生き物 <ol style="list-style-type: none"> ①春の芽生えを感じる草花 ②春の訪れを感じる生き物 4. 行事関連・制作活動
保育者の援助	<ol style="list-style-type: none"> 1. 時間 (計画・個に応じた枠組み) 2. 空間 (環境設定、活動場所) 3. 人間 (人間関係能力を育む出会い) 4. モノ (教材・教具、自然・社会事象) 5. 技能 (スキルと発達段階の把握) 6. 心情 (子ども理解と働きかけ) 	<p>廊下</p> <p>取得しやすい片付けやすい配慮。イメージが広がる材料・用具</p> <p>あいうえお表・時計・カレンダー</p> <p>自分で、整理整頓・活用しやすいように配置。</p> <p>積み木・机・段ボール</p> <p>立体的な構成を工夫できるもの</p> <p>中庭</p> <p>自然の変化に気づくモノ</p> <p>見通しをもった生活ができるもの</p> <ul style="list-style-type: none"> ・表現活動や交流活動を楽しめる材料・用具や場・時間の確保。 ・園庭の自然物の変化に気づき、興味や関心を引き出す環境構成。 ・主体的・主体的活動の見取りと見守り。 ・時間の見通し、意識化できる環境作りと言葉かけ 	<p>廊下</p> <p>取得しやすい片付けやすい配慮。イメージが広がる材料・用具</p> <p>あいうえお表・時計・カレンダー</p> <p>自分で、整理整頓・活用しやすいように配置。</p> <p>積み木・机・段ボール</p> <p>立体的な構成を工夫できるもの</p> <p>中庭</p> <p>自然の変化に気づくモノ</p> <p>見通しをもった生活ができるもの</p> <ul style="list-style-type: none"> ・表現活動や交流活動を楽しめる材料・用具や場・時間の確保。 ・園庭の自然物の変化に気づき、興味や関心を引き出す環境構成。 ・主体的・主体的活動の見取りと見守り。 ・時間の見通し、意識化できる環境作りと言葉かけ
週の予定	/ (月) / (火) / (水) / (木) / (金)	/ (水) / (木) / (金)	/ (金)